

聖書：士師記5：1～31（19～31）

説教題：日がさし出るように

日時：2014年1月26日

この5章は4章の出来事に基づいて、デボラとバラクが歌った歌です。4章では、イスラエルがカナンの王ヤビンとその將軍シセラの軍隊を打ち破りました。相手は鉄の戦車900両を持ち、イスラエルはその下で20年間、圧迫されていましたが、主の助けによって勝利し、敵の支配から解放されました。その時に歌われた勝利の歌が、この5章です。ですから今日の箇所を理解するためには4章の内容を良く知っている必要があります。そうでないと、この5章だけ読んでもさっぱり分からないということになりかねません。逆に私たちはこの5章を味わうことによって、すでに見た4章をより良く理解することができることにもなるでしょう。

この詩を見ていく上で一言申し上げたいのは「詩」というのはなかなか解釈が難しいことです。日本語の詩もそうですが、ヘブル語の詩なら、益々私たちにはそうでしょう。私が神学校時代、ヘブル語を教わったかの有名な先生は、詩篇の授業をしながら、「皆さん、詩篇は説教しない方が良いでしょう。」と言っていました。もちろん、そんなことを言ったら聖書のどの箇所も説教できないことになってしまいますが、先生のおっしゃりたかったことは、詩文は解釈がそう簡単ではない。だから相当の覚悟と研究をもって取り組まなければならないということだったのでしょう。この士師記5章も、一通り読んだだけでは何を言っているのか分からないところがたくさんあります。そして他の訳、たとえば口語訳や新共同訳聖書を参考にすると、まるっきり違う訳になっている箇所がたくさんあります。それだけ、詩を訳すのは難しいということでしょう。そのようなある種の困難を予測しながらも、何とかこの箇所のメッセージに近付いてまいりたいと思います。

まず1節：「その日、デボラとアピノアムの子バラクはこう歌った。」おそらくこれはデボラが中心となって歌い、それにバラクが唱和する形を取ったものと思われます。その出だしは重要です。2節：「イスラエルで髪の毛を乱すとき、民が進んで身をささげるとき、主をほめたたえよ。」ここは詩全体のテーマを述べている大切な部分です。髪の毛を乱すとは、髪を切らないナジル人の誓願、すなわち主に対する誓約や献身を表すしるしのことでしょう。そのようにイスラエルの中で、主に献身する者たち、特に指導者たちがそうする時、ということをは語っていると思われます。口語訳聖書はここを「イスラエルの指導者たちは先に立ち」と訳しています。そのリーダーたちと共に、次には「民が進んで身をささげる時」とあります。その時、「主をほめたたえよ」とデボラは言います。ここにデボラの歌は、主への賛美の歌であることが明らかにされています。彼女は特に、イスラエルの民が主に熱心に献身する姿を見て、主をほめたたえよ！と言っています。具体的には前の章で見た戦いへの召しに、彼らが熱心に応答したことを指していると思われます。そのように彼らを導き、献身させる主を賛美しているのです。また、その彼らを用いて偉大なみわざを行なわれる主を賛美しているのでもあるでしょう。

3節：「聞け、王たちよ。耳を傾けよ、君主たちよ。私は主に向かって歌う。イスラエルの神、主にほめ歌を歌う。」ここの「王たち」「君主たち」というのは、イスラエルにはまだ王

制がありませんから、カナン人の王や支配者を指していると思われます。デボラはその彼らに「耳を傾けよ」と言っています。すでにイスラエルはカナンの王たちに勝利しましたが、その異邦人の王たちにデボラは主の卓越性を宣言しているのです。そして2節で「主をほめたたえよ」と人々に呼びかけたことに自らが応答するようにして、3節で「私は主に向かって歌う。イスラエルの神、主にほめ歌を歌う。」と言って主を賛美しているのです。

4～5節では、これまでの主の力強いみわぎが振り返られています。ここは出エジプトからカナンに入るまでの主のみわぎを述べたものと思われます。しかしそんな主の民でありながら、つい最近までのイスラエルの状況は思わしくありませんでした。6節と7節：「アナテの子シヤムガルとき、またヤエルとき、隊商は絶え、旅人はわき道を通った。農民は絶えた。イスラエルに絶えた。私、デボラが立ち、イスラエルの母として立つまでは。」カナンの王ヤビンとシセラによって主要道路はすべて支配されました。そのため、商業活動をする隊商たちは通行できない。旅人がかろうじてわき道を通ることができるくらい。農民も農作業が危険となり、その姿が絶えてしまう。なぜこんなことになったかと言えば、それは8節にありますように、イスラエルが新しい神々を選んだからです。主を捨てて、偽りの神々により頼んだからです。その結果、城門にまで戦いが及んだ。そしてイスラエル人は十分な武器を持ってないほど、無力な状態に落とされた。これは彼らが主に背を向けて歩んだがゆえに、刈り取らなければならなかった災いです。

しかし、デボラは其中で希望の調べを9節で歌います。「私の心はイスラエルの指導者たちに、民のうちの進んで身をささげる者たちに向かう。主をほめたたえよ。」お気づきのよう、これは2節とほぼ同じです。この暗やみの時代にあつて、イスラエルには主に応答する指導者と民たちがいました。このような彼らが残されていることにデボラは大きな希望を見、主を賛美しています。そしてここから新しい展開が始まるのです。

10節から13節は戦いのための呼びかけです。10節であげられているのは、色々な階級の人たちです。最初の「黄かつ色のろばに乗る者」とは上流階級の人を差し、最後の「道を歩く者」とは一般市民、あるいは下層階級の人たちを指します。そのあらゆる階層の者たちよ、聞け！と言われています。「水汲み場での、水を汲む者たちの声にと。これは具体的に誰のことか、良く分かりません。ある人は牧者ではないかと言いますし、ある人は賛美をリードする人たちではないかと言います。いずれにしろ、大切なのはその内容です。語られているのは「主の正しいみわぎと、イスラエルの主の農民の正しいわぎ」。この部分は口語訳では「主の救いとイスラエルの農民の救い」、新共同訳では「主の救いを語り告げよ。イスラエルの村々の救いを。」となっています。すなわちこれは一言で言えば「福音」です。主はいつまでも悪をそのままにはしておかれない。ご自身により頼む者を救い、悪をさばいて、正義を現わされる。この福音に聞いて、主の招きに従うように！ということです。そして12節の言葉があります。「目ざめよ、目ざめよ。デボラ」「起きよ、バラク。」聖霊がこの言葉をもってデボラとバラクを覚醒し、行動を起こすようにと促します。「とりこを捕らえて行け」という言葉は、敵はすでに渡されていることを意味します。あとは信仰によってそれを自分のものとしていくだけです。

13節から18節にかけては、主の招きに応答した部族と応答しなかった部族のことが述べられています。まず北イスラエルの10部族の内、6つの部族がみことばに励まされ、集まって

来ました。エフライム、ベニヤミン、マキル、ゼブルン、イッサカル、18 節のナフタリ。中でもイッサカル、ゼブルン、ナフタリの献身ぶりが賞賛されています。15 節：「イッサカルはバラクと同じく歩兵とともに谷の中を突進した。」18 節：「ゼブルンは、いのちをも賭して死ぬ民。野の高い所にいるナフタリも、そうである。」その一方で、応答しなかった部族もありました。15 節のルベン、17 節のギルアデ、ダン、アシェルです。ルベン族については、15 節に「心の定めは大きかった」と記されていますが、口語訳では「大いに思案した」と訳されています。すなわちルベン族は戦いの召集を受けて、どうするか非常に考えが揺れた。そして結果的に彼らは家畜を飼うのに適した自分たちの土地で羊たちの間にとどまることを好み、静かな生活を選んだ。ギルアデもヨルダン川の反対側にとどまって、そこを越えて参戦しようとはしなかった。ダンとアシェルは海に近く、そこでの自分たちの仕事を優先し、戦いに出てこなかった。そして特に厳しく責められているのは、23 節のメロズです。これはどこにあった町か、はっきり分かりません。なぜメロズは厳しく責められているのでしょうか。先に述べた部族は、今回の戦いの地域からは少し離れたところに住んでいました。だから来なくても良いということにはなりません、まだその叱責の調子は穏やかです。それに対してメロズはおそらく今回の戦いに近い地域にあって、当然貢献することが期待されていた。なのに彼らは兄弟たちを助けようとしなかった。そのため、主の使いによって、あなたは主を助けなかったと言われ、激しく呪われています。このことは兄弟たちの奮闘を見ても助けの手を伸ばさず、自分だけ安楽をむさぼっている者に、主はどんなに厳しく報われるかということを示しています。

さて、献身した部族たちの戦いぶりはどうだったのでしょうか。19 節からを見ますと、カナンの王たちは分捕り品を得なかった、すなわち勝利を取められませんでした。そして主がいかに、イスラエルを助けて下さったかが 20 節 21 節にあります。「天から星が降った」とは、どういうことでしょうか。多くの注解者たちは、これは星が出ていた夜に戦いが行なわれたことを表しているのだらうと言います。その星が降ったとは、それまで明るく輝いていた星が落ちたように、辺りが急に暗くなったとか、あるいは 21 節ではキシオン川が氾濫したことが書いてありますから、星が降るように土砂降りの雨が降った、などという意味に考えられます。いずれにしろ、まさかの展開がそこにはありました。辺りが泥沼と化しては、鉄の戦車は使いものになりません。あれだけ手強く見えた鉄の戦車も、一つ状況が変わればかえってマイナスになってしまう。主はこのようにして、より頼む者を助けて下さった。

24 節以降には、シセラの最期が記されています。ヤエルが取った行動については前回見ましたので、今日は繰り返しません。ここでのポイントは、あれだけイスラエルが恐れていた敵将シセラが、こんなみじめな最期を遂げたということ。20 年間も自分たちを圧迫した敵のあつけない結末。私たちの前に立ち足る大きな問題も、主の前ではいかにちっぽけなものに過ぎないか、ということです。

28 節から 30 節は敵のあわれな姿です。シセラの母は息子の帰りが遅いと心配しながら外を見つめていると、姫君たちは 30 節の言葉を持って彼女を慰めます。これこれこのようなことをしているから、遅れているのでしょう、と。これは大いなる皮肉です。むなしい慰めでしかありません。いずれ彼女たちは絶望の淵に落とされることでしょう。主の敵となり、悪を行なう者は、最後にはこのような報いを刈り取るということです。いつまでも悪者が栄光を保って

いることはできない。

そうしてこの歌の結論・クライマックスが31節です。「『主よ。あなたの敵はみな滅び、主を愛する者は、力強く日がさし出るようにしてください。』こうして、この国は40年の間、穏やかであった。」 私たちはここから今日のまとめとして三つのことを学ぶことができます。まず一つ目は、デボラはここで単にイスラエルの一つの勝利を喜んでいるのではなく、ここに霊的な意味を見ているということです。31節には原文に「そのように」と訳されるべき言葉があります。新共同訳聖書は31節前半を「このように、主よ、あなたの敵がことごとく滅びますように」と訳しています。つまり今回のことは、主がこれから現わされる最終的なみわざの前味であり、予告であるということです。将来行われることのプレビューであるということです。悪は決していつまでも放置されたままではない。主はご自身の正義を必ず現わして、このようにご自身の御国を打ち立てられる。

今日の私たちも、主の救いを頂いているとは言え、日々、悪の力、暗やみの力との戦いの中にあり、そういう意味で悩みの中にある者たちです。キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまでと定められていますが、まだその日が来ているのを私たちは見ていません。しかし私たちはそこで希望を失ってはならない。デボラは今回のことに示されたように、主は必ず暗やみの力を打ち滅ぼし、正義が住む栄光の御国を来らせてくださる、と告白しています。私たちもこのデボラの歌を共に歌って信仰を告白し、日々の戦いの中で頭を高く上げて行くべきです。

二つ目に見ることは、主の祝福にあずかるのは誰かということです。31節に「主を愛する者は」とあります。このデボラの歌の中でも、主を愛して献身した者たちとそうでない者たちのことが述べられ、主に従わなかった者たちには呪いの言葉さえ語られていました。ですから主の祝福にあずかろうとするなら、私たちは自分が主を愛する者でなければなりません。

主を愛する者とはどういうことでしょうか。この時代に身を置いて考える時、まず思い起こされることは、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。」という申命記6章5節の御言葉、いわゆる第一の戒めです。そしてその具体的な中身が十戒の第1戒から第4戒に当たります。すなわちまことの神だけを神とし、他の偶像を拝まず、主を尊び従うことです。このデボラの歌にもあったように、イスラエルが主を忘れ、新しい神々に心を向けた時、イスラエルはさばきの中に置かれました。そのことを悔い改めて、主を主とし、主に第一の心を向け、主を愛して従うこと。デボラがこの歌の中でたびたび、主に進んでその身をささげた者たちのゆえに主を賛美したように、そのように主に献身し、主との契約に忠実に生きることが主を愛するということでしょう。

そして三つ目に見るのは、そのような者たちに注がれる主の祝福についてです。それが31節の「力強く日がさし出るようにしてください。」ということです。日が昇るまでは、暗やみが地を覆っています。しかし太陽の光がさし出るとどうでしょうか。暗やみは一気に追い払われます。そして太陽が上るごとに、その力強い光の前に、暗やみはついに消えざるを得ません。そのような勢いをもって、主を信じる民の栄光が輝き現れるように、という祈りです。私たちの日々の生活も、まだ悪の力が滅ぼし尽くされおらず、むしろやみが支配しているように思われる時があるかもしれません。この士師記の時代は特にそうでした。しかしデボラは、主を

愛し、主を恐れ、主に従う者に、主が偉大な光を与えて下さることを、この戦いの中に見て取りました。主はご自身に従う者たちをこのように必ず高く上げて下さる。主を愛する者たちの将来は確固としており、日の出の勢いのように輝かしいものである。私たちもこの御言葉に励ましを頂いて、今週の戦いへと進みたいと思います。主を愛し、主に従う民を、主は必ず上からで助けて下さいます。そして必ず力強く日がさし出るようにして下さいます。私たちはそのみわざを待ち望みつつ、改めて自らを主におささげし、このように導いて下さる主をデボラと共に賛美し、この主を全世界に宣べ伝える歩みへ向かって行きたいと思います。